

# 眞実教の開頭

寺川俊昭

一

仏者親鸞に動いた真宗興隆の志願は、歴史的には、真宗開頭の偉大なる仏事を果たし遂げた本願の論書、『教行信証』を書かしたためたのであるが、その浄土真宗開頭の根本所依として、開巻第一の「願浄土眞実教文類」は、

夫れ眞実の教を顕わさば、則ち『大無量寿経』是れなり。

と、『大無量寿経』なる教説を掲げるのである。教主世尊一代の教説の中から、本願の教説である『大無量寿経』を選び取り、この教説に眞実教を聞き取り、これを所依として仏道を浄土真宗として開頭すると、「教巻」の標挙は告げるのであるが、この教説の選びについては、早く曇鸞が、

釈迦牟尼仏、王舎城及び舎衛国に在まして、大衆の中に於いて、無量寿仏の莊嚴功德を説きたまへり。

と浄土の三経を示唆したのを承けて、法然が『選択集』において、「正しく往生浄土を明かすの教」として『三経一論』即ち『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』及び『往生論』を挙げ、これを以て浄土宗立教開宗の根本所依としたことに依るものであることは、いうまでもない。その際親鸞は、曇鸞・法然二人の祖師が、往生浄土の仏道の所

依の教説として、三経をいわば平等に尊崇したのに対して、独り『大無量寿経』一経をもって真実教とし、『観無量寿経』及び『阿弥陀経』二経の教説については、方便教の位置を与えたのであった。

いかなる理由によって、親鸞は独り『大無量寿経』を、真実教と仰いだのであろうか。この経の独自性を、周知のように親鸞は「教巻」に、

この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。ここをもって、如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり。

と捉えている。その要点は、凡小とし群萌として生きるものをこそ、如来の大悲は救おうとするものであり、その救いの道として、本願の名号を施与したという了解にあらう。この了解を踏まえて更にいえば、『大無量寿経』とは、一切苦悩の群生海を、本願の名号の聞名において無上正真道に立たしめようとする教説であると、了解することができると思う。いわゆる「各々安立無量衆生、於仏正道」である。親鸞のこの択法眼が捉えた、凡小〓群萌、即ち一切苦悩の群生を以て本願の教説はその機とするというところにこそ、親鸞が『大無量寿経』を以て真実教とする第一の理由があると、私は思う。群萌を聞名において、仏の正道において安立せしめる。このことを内実とする、本願の教説による群萌〓凡小即ち「そくばくの業をもちける身」として生きるものの、救いの一道を明らかに説くところにこそ、如来としての教主世尊の大悲の満足があり、出世本懐の満足がある。

親鸞のいのちともいふべき本願の信について、その深化に決定的な意味をもつ出来事の一つが越後流罪であったことは、今更いふまでもあるまい。その越後流罪が親鸞の思想の展開〓深化にとってもった意味は、群萌の発見であったことは、現在ではもはや通念である。雑草即ち泥まみれになって生きるものを意味するこの群萌こそ、流人親鸞が

その中に投げ出され、生活を共にしなければならなかった人々であり、その生き様を表わす言葉である。その「いなかの人々」即ち群萌が、一体何に依って救われ得るのか。この重く切実な課題に真向かいになった親鸞の強靱な推求が、群萌を救うことをこそ願いとして、そこに本願の名号を施与し、この本願の名号の聞名において群萌の一人ひとりをお大悲心に呼び帰し、仏の正道に安立せしめようとする『大経』の教説に、やがて「群萌の一乗」を読み取っていったのである。親鸞が帰入した浄土の仏道は、もとより早くから時機相応という課題をもち、その機となる衆生の相を凝視し続けてきた歴史をもつのであるが、今親鸞は群萌をこそその機とするという本願の教説に、日本中世の現実に生きる「いなかの人々」をお大悲に攝取し、のみならず仏の無上正真道に立たしめるといふ歴史的課題を解く道を、確かに見出したのであった。この眼を得た時、いなかにおいて泥まみれになって生きる群萌は、本願の機としてそれ自身がお本願によって救われるべき存在であると共に、更にそのことによって本願の眞実性を証し、大悲を証しすべきものとして、眞に信頼し尊敬すべきものとして見られることとなる。親鸞がそのような念仏者を「御同行、御同朋」と尊敬の意をこめて交わったと伝えられることも、更にその著作にしばしば大切な自覚的意味を託しつつ、

いなかのひとびとの、文字のころもしらず、あさましき愚癡きわまりなきゆえに、やすくころえさせんとて、おなじことを、たびたびとりかえしとりかえし、かきつけたり。ころあらんひとは、おかしくおもうべし。あざけりをなすべし。しかれども、おおかたのそしりをかえりみず、ひとすじに、おろかなるものを、ころやすからんとて、しるせるなり。『唯信鈔文意』

としるし、あるいはまた、「具縛の凡愚、屠沽の下類」といふ言葉で本願の機を語りつつ、

具縛は、よろずの煩惱にしばられたるわれらなり。(中略)りょうし・あき人・さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。『唯信鈔文意』

と語るのには、すべてこれ本願の教説である『大無量寿経』を所依とする、仏者親鸞の自覚的立場を語り告げるものである。このような自覚に立って、親鸞は『大無量寿経』をもって、高らかに眞実教と宣言したに違いない。

## 二

このように、歴史的乃至は社会的な広さにおいて本願の機を捉えた親鸞が、一人の仏教者として立った自覚的立脚地は、もとよりその内面に確立した選択本願の行信、即ち一心帰命の信そのものである。そしてこの行信こそが、親鸞における本願の自証であることはいうまでもない。このような選択本願の行信の親鸞における確立について、そのかけがえのない縁となった出来事が、法然の念仏往生の教説との値遇であったことは、改めていうまでもない歴史的事実であるが、この値遇の意味について、私は先ず二つのことを確認しておきたい。その一は、選択本願の念仏によって念仏往生の一道に立つとの法然の教説は、実は親鸞の聞思がうなづいた了解においては、法然の信念として表白され語り告げられている、本願為宗、名号為体の教説である『大無量寿経』の歴史的現在であったということである。選択本願の念仏に依る念仏往生の仏道は、根源に帰せば、念仏往生を如来の本願として説く教主世尊の教説の等流以外の何ものでもない。実はこの点に、終生法然を「よき人」と仰ぎ、「眞宗興隆の大祖」と帰依した親鸞が、『大経』を眞実教と仰ぐ内発的な理由があると、私は了解するのである。

その二は、親鸞にとって決定的な意味をもつ出来事でありつつ、やはり極めて個人的な体験であった法然の教説との値遇、この出来事のもつ仏道的意味を、明確に親鸞に自覚せしめる所依となったもの、それこそが『大無量寿経』の教説、就中いわゆる「願成就の文」といわれる教説であった。十七願成就、十八願成就という意味深い事実を次のように語るこの「願成就の文」の教説は、親鸞が深く帰依した法然が選択本願の念仏を語り続けているその事実の意

味を、そしてその教説に遇うて親鸞に発起した、歓喜に満ちた根源的覚醒の意味を、明確にしかも大きな感動の中に自覚せしめる所依となったものである。

十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう。(十七願成就)

諸有衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と、誹謗正法とをば除くと。(十八願成就)

十七願成就の教説は、改めていうまでもなく、末法濁世に生きる凡夫の身のままに、選択本願の念仏に帰して念仏往生の道を生きるその身の事実を以て、如来の恩徳を讃嘆して止まぬ「よき人」法然に、日本の末法濁世に応化した諸仏如来を親鸞に仰がせ、自覚せしめたものである。そして第十八願成就の教説に依って親鸞は、正にその法然の念仏往生の教説に値遇して得た、歓喜に満ちた一念の淨信の意味を正確に自覚し、その淨信を同時に如来の至心即ち真実なる願心の回向成就であると、大きな感動の中に深々と自証したに違いない。のみならずこの一念の淨信が相続され展開していく願生心において、往生の願いは現生に満足し、しかもこの往生淨土する生の内実は、そこに仏道の志願を満足する住不退転の確信をもって生きる身の成就、即ち「入大乘正定聚之教」であることを、深い感銘の中に確かに自証していったに違いないのである。このような深い覚知を親鸞に確立する所依となったこの「願成就の文」の教説を見出した時、親鸞は自身を群萌として生きる者という自覚に立ちつつ、聞名によってこのような覚知を諸有の衆生、即ち凡小群萌として生きる身に成就する『大無量寿経』を、内から噴出するような確信に立って、真実教と顯揚する立脚地を得たのであったと、私は了解するのである。

いかなる言葉をもって、この本願の行信を表白するか。即ちいかなる自覚内容を、この本願の行信に見い出すのか。この親鸞の推求に最も正確にして積極的な応答をするもの、それが自ら『無量寿経』の優婆提舎と名のる、世親の

『願生偈』であった。『偈』はその劈頭に、

世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、

安楽国に生まれんと願ず。

と一心帰命の信を表白し、その信に開示される廣大無辺際なる世界即ち安楽浄土を、二十九種功德莊嚴の成就する世界として語った後、その浄土の功德を超越的根拠として内実を得た願生心を、

我、論を作り、偈を説きて、

願わくは弥陀仏を見たてまつり、

普くもろもろの衆生と共に、

安楽国に往生せん。

と表白している。世親のこのような一心帰命の信とその展開である一心願生の表白に、親鸞は「聞其名号信心歡喜乃至一念、至心回向、願生彼国即得往生、住不退転」と教説される本願の行信に対する証誠の言、即ち歴史的証言を聞き取ったに違いない。『願生偈』に依る一心帰命の本願の信の内容づけ、ここに法然の「三經一論」の立教を承けつつ、『願生偈』を「一心の華文」としてそこに甚深の教恩を感じる、親鸞の信仰理解の獨創性と自覺的立脚地がある。

### 三

「願成就の文」の教説に依るならば、第十七願成就の事実である諸仏善知識の教言、それを聞きそれに遇うことを縁として發起する、第十八の願心の回向成就としての一心帰命の信の現前、これを親鸞の歴史的經驗として尋ねればわれわれはそれを、建仁元年に事実となった、真宗興隆の大祖源空法師の選択本願念仏の教言との値遇を縁とする、

親鸞が本願に帰して念仏する身として尽十方無碍光の世界に甦った、あの出来事としてうなづくことである。この、親鸞が念仏する仏者として新生した決定的出来事である回心を、周知のように親鸞は、

然るに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の曆、雜行を棄てて本願に帰す。

と述懐している。「本願に帰す」とは、われらを清浄業処たる浄土に招喚し続ける本願の聲に喚び覺まされた自覚であり、我執に立って生き続けてきた自力の執心を翻し棄てて、本願力に乘託して生きる身と転成した謝念の表白に外ならない。法然の教言との値遇によって獲られた回心が、このようなものとして自覚されたところには、「観仏本願力 遇無空過者」と語る『願生偈』の指南があることは、いうまでもあるまい。要するに『願生偈』が不虛作住持功德として如来の功德を語るこの教言に依って、親鸞は自身が仏者として新しいのちに甦ったあの決定的出来事である回心を、「棄雜行兮帰本願」という意味をもつものとして、明確に自覚することとなったのだと、疑問の余地なく私は了解する。

してみると、視点を転じて尋ねるならば、「棄雜行兮帰本願」と述懐される回心において、親鸞が確かにそして深々と自証したものの、それこそが安楽浄土の不虛作住持功德に外ならない。言葉を換えて、それを如来の眞実功德の自証というてもよい。その不虛作住持功德の自証を、親鸞は次のように語る。

「観仏本願力 遇無空過者」というは、如来の本願力をみそなわずに、願力を信ずるひとはむなしく、ここにとどまらずとなり。「能令速満足 功德大宝海」というは、(中略)よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信する人の、そのみに満足せしむるなり。如来の功德のきわなくひろくおおきに、へだてなきことを、大海のみずのへだてなくみちみてるがごとしと、たとえてまつるなり。(『尊号眞像銘文』)

いかにも明確なこの述懐には、何の曖昧さもない。本願力との値遇において身に自証するもの、それが如来智慧海の

内証たる眞実功德、即ち無上涅槃の功德であることを、この文章は疑問の余地なく明確に語っている。本願の信の自証するものを『願生偈』に依つてこのように自覚することができた時、親鸞教学はその自覚的立脚地を確かに得たのであり、本願の仏道を以て誓願一仏乗たる無上仏道と自覚し顕揚する立脚地を、確かに得たのであった。

この立脚地に立って、一心帰命の信たる選択本願の行信について、その契機である行と信のもつ質を、親鸞は次のように捉えることとなった。

この行は……極速円満す、眞如一実の功德宝海なり。

大信心はすなわちこれ……証大涅槃の真因、極速円融の白道、眞如一実の信海なり。

行信に自証せられるものが眞如一実の功德である。視点を變えていえば、行信においてはたゞらき、現行するものは、眞如一実の功德である。このことをしっかりと踏まえるならば、行信発起の所依である眞実教もまた、眞如一実の功德を速かに告げ知らせ、現前せしめるような言説と捉えなければならないこととなる。果して親鸞はいう、「速疾円融の金言」と。実はこの点に、親鸞が本願の名号を説く『大無量寿経』を眞実教と顕揚する、最も大切な根拠があるといふべきではあるまいか。

この洞察に立って、浄土眞宗を実現する契機である「眞実」の教・行・信・証について、その質を親鸞が基本的にどのように捉えていたかを、要点的に確かめてみたい。

眞実教 撰取不捨の眞言。超世希有の正法。一乗究竟の極説。速疾円融の金言。

眞実行 この行は、すなわちこれももろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、眞如一実の功

徳宝海なり。

円融至徳の嘉号。超世希有の勝行。円融眞妙の正法。至極無碍の大行。

眞実信 証大涅槃の眞因。極速円融の白道。眞如一実の信海。

眞実証 利他円満の妙位。無上涅槃の極果。

四法を通して「円融」が反復し、更に行信については、「眞如一実」という意味深い言葉によって、この二法の質が捉えられている。この円融について親鸞は、「よろずの功德善根みちみちてかくることなし。自在なるころなり。無碍ともうすは、煩惱悪業にさえられず、やぶられぬをいうなり。」（『一念多念文意』）と解説しているが、意をとってこれをいえば、清浄・眞実をもって表わされる無上涅槃の功用を示す言葉であると了解して、誤りはないと思う。眞如一実については先に一言したが、「一実眞如ともうすは、無上大涅槃なり。」（『一念多念文意』）と解説する通り、眞実をより厳密に語るこの言葉が、如来の自内証である法性眞如を、無上涅槃を表わす言葉として、親鸞が一種の感銘と確信を託して反復するところに、私は十分の注意をしたい。行信は殊に無上涅槃と深い関わりをもつ法と、把握されている。この親鸞の極めて積極的な行信理解を、更に一二確かめてみたい。

この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかひの御なり。（『唯信鈔文意』）

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。（『正信偈』）

眞に知りぬ。弥勒大士、等覚金剛心を窮むるがゆえに、龍華三会の暁、当に無上覚位を極むべし。念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。（『信巻』）

このようにして、親鸞は必ずや不虛作住持功德の自証に立って、眞実教との値遇に縁って獲られた本願の行信の自覚するところをよくよく案じみ、遂にそれを、無上涅槃の功用に触れた自覚であると、確かに自証したのであった。あるいはむしろ、眞実教との値遇に縁って拳体の回心懺悔を体験した親鸞は、この回心において初めて自身を「穢悪

汚染・虚仮諂偽」なるものと懺悔した時、そこによく回心せしめよく自覚せしめるものを清浄にして真実なるものと自証し、仰いだのだと了解すべきものかも知れない。このような親鸞の推求によって、本願の行信において体験され自証されるものは、「清浄・真実」という言葉によって表わされる真如一実の功德であり、無上涅槃の功用であると明確に自覚されてきたのであった。視点を変えていえば、行信は真如一実たる無上涅槃の功用を現前せしめ、行信を得たものに生き生きと、そして端的にその功用を実現せしめるような法として、その仏道における意味がしっかりと把握されていたのだと、私は了解する。ここに親鸞教学は、独自の、そして最も創造的な立脚地を得たのであった。

#### 四

浄土真宗なる仏道を実現する教・行・信・証の四法について、親鸞が基本的にもった了解を、標榜の文によって確かめてみたい。

真実教

大無量寿経

真実の教  
浄土真宗

真実行

諸仏称名の願

浄土真実の行  
選択本願の行

真実信

至心信楽の願

正定聚の機

真実証

必至滅度の願

難思議往生

四法の内、真実教については親鸞はその根拠となる願名を挙げていない。しかし既に曾我量深師によって、真実教が第十七諸仏称名の願に応じ、第二十二還相回向の願に乗じてなされた言説と了解されていることを、想起しておきたい。こうして浄土真宗なる仏道を実現する契機である教・行・信・証の四法について、

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。（証巻）

と明記されるように、全てこれ本願に根拠をもち、本願の成就としてあるもの、即ち如来大悲回向の賜物と捉えたところに、浄土真宗が本願の仏道としてその性格を浮彫にする所以があるというべきであろうか。

ところでこの四法の内、先ず真実行の標挙に注意したい。諸仏称名の願によって成就するものは「本願の名号」であることは、改めていうまでもあるまい。その本願の名号についての、前引の『唯信鈔文意』における親鸞の了解、更に『一念多念文意』の、

真実功德をもうすは、名号なり。一実真如の妙理円満せるが故に、これを大宝海にたとえたまう。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。

という了解を併せ尋ねるならば、この諸仏称名の願によって成就する本願の名号のもつはたらきを、親鸞が「浄土真実の行」と標挙するその意味を、私は次のように了解したのである。即ち浄土＝無量光明土として真実功德のはたらく世界を開示する行為、という意味である。法然興隆の浄土宗なる立場が、念仏を以て「往生浄土の行」とする了解を基本にもつことは改めていうまでもないが、そのような了解に簡んで、流転する衆生即ち三有虚妄の生にある衆生に、無量光明土として浄土即ち真実功德のはたらく世界を開示する、そういう意味をもつ行なのだとする、より根源的な親鸞の名号解釈のもつ現実性と創造性に、私は十分の注意をしたと思う。往生浄土の行として念仏を語る立場が、通念的にいわば自明の前提として浄土を措定し、その浄土へ往生せしめる行として念仏を捉えるのと区別し

て、浄土を喪失して流転する衆生に、浄土を開示するという根源的行として、本願の名号を把握したのであり、そのような根源性をもつ名号が、取りも直さず選択本願のはたらくに外ならぬと、親鸞は了解したのではなかつたろうか。

この本願の名号に帰した自覚である眞実信心を、親鸞は勿論、至心信樂の願成就の信心、換言すれば至心に始まる至心・信樂・欲生なる願心の回向成就の信と了解した。私は眞實行即ち大行を、「称無碍光如来名」と明確に定義した親鸞が、それにも拘わらず眞実信については、これがそれであると何等の定義も行っていないことに、一種の驚きを感じるのであるが、だからこそ眞実信心とは本願の名号に帰した自覚と捉えなければならぬことを思う。この眞実信心がその利益として実現するものを、ここで親鸞は正定聚の機と語っている。正定聚とはいうまでもなく、無上涅槃の証りを開くべき身と定まることであり、いわば必至滅度の位である。この了解は、前に眞実信心の意味を、「証大涅槃の眞因、眞如一実の信海」と捉えた了解と軌を一にしており、更に眞実信心の契機である眞實行についてそれが眞実功德の世界を開示する行と了解したと相まって、眞実信心なるものが眞直に無上涅槃に向かつて開かれた自覚であることを、疑う余地なく明確に親鸞は捉え、そして語り告げているのである。

行と信、その契機は二つであるけれども、現実にあるのは一心帰命の信、即ち選択本願の行信である。その行信に開かれる浄土が、眞実報土即ち無量光明土として体験せられ、その行信に自証されるものが、眞如一実の功德として尋ね当てられたのであるが、この眞実功德のはたらく世界を眞実報土として捉えたところに、親鸞の浄土了解の積極性があるというべきであろう。こうして眞実信心にリアライズする眞実証は、浄土の功德の証得をその内実とすることとなるのであるが、このことが証大涅槃即ち無上涅槃の極果に究竟することも、改めていうまでもあるまい。このように尋ね来たって、私は次のようにいうことができると思う。即ち、眞実の行信に開示され自証されていく浄土の功德が、その行信の利益として実現する正定聚の機において行証される歩み、それをこそ難思議往生というのであり

そのような往生こそが、無上涅槃の証得に究竟していくのであると。こうして、親鸞ははっきりと断言する。

ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、广大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。(『唯信鈔文意』)

この本願の行信に始まる大般涅槃道の具体性と意味深さを、私は頻りに思う。煩惱の身をもって生きる凡夫をこそ機とし、その煩惱に少しも妨げられないで実現する大般涅槃道こそが、取りも直さず難思議の往生、即ち眞実報土としての淨土眞宗の積極性があるろう。そしてこのような大般涅槃道こそが、取りも直さず難思議の往生、即ち眞実報土の往生の内実に外ならないと了解する。更に、このような本願の行信の実現するものを往生として、あるいは大般涅槃道として捉えるのは、もとより、行信を獲た人即ち金剛心の行人乃至は信心の行者の生き様としてそれを捉えたからである。もしこれを金剛心の行人、即ち往相回向の心行を獲た人の内面において尋ねるならば、親鸞が「信巻」三心一心の間答において推求し開顯した、一心帰命の信が自然に一心願生の心として展開するその内面に自覚されるころの、至心・信樂・欲生なる願心の展開においてそれは支えられているというべきではあるまいか。

至徳の尊号を踏まえて、至心・信樂・欲生に親鸞は三重の出体をいう。そこに名号↓至心↓信樂↓欲生という次第がみられており、それを踏まえて尋ねると、ある意味で願心の展開というてよいものを、親鸞はみていたということとがでしようが、注意すべきは名号の意味について親鸞はその名号釈において、要点として「本願招喚の勅命」をあげ、更に欲生の解釈として「如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命」をあげるといふことである。とすれば三心の願心というても、本願の名号に帰したそこに自覚される信心の根源であり、全体これ、本願の名号に帰した自覚の内面の出来事であろうか。のみならず親鸞は、教説される至心・信樂・欲生の三心をそれぞれ、眞実心・大悲心・回向心と自証した。名号に帰入する端的に値遇し自証する如来の眞実心、そこに親鸞は如来の発願と兆載永劫の修行とい

う、信心発起の深くして遠い因位を大きな感銘の中に感得したのである。この真心心に触れた時、今更のように知られる無明海に流転するわれらの姿と、それを大悲矜哀して眞実報土を開示する大悲心。更にわれらを眞実功德の回施において願生の自覚道に立たしめる回向心、しかもこの回向心に、親鸞は大悲心の成就をみたのである。本願の行信の内面に自覚自証されるこのような願心の展開に支えられて、煩惱成就の群生は現生正定聚を立脚地として大般涅槃道に立つこととなるのであり、この大般涅槃道を以て、親鸞は眞実報土の往生の内実としたのであった。この大般涅槃道を主体的に生きようとする歩み、それ故に眞実報土の功德を主体的に行証しようとする歩みを、私は「一心願生の歩み、即ち曇鸞が「本願無生の生」と告知する、願生浄土の一道と了解するものである。

その際親鸞は、更にこの一心願生の一道に行証されるべき浄土の功德について、「証卷」に『論註』により五種のそれを挙げていることに、注意したい。

#### (一) 妙声功德、

『経』に言く、「もし人ただかの国土の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生まれんと願ぜんものと、また往生を得るものとは、すなわち正定聚に入る。」これはこれ国土の名字、仏事をなす。いづくぞ思議すべきや。

#### (二) 主功德。

正覚の阿弥陀、不可思議にまします。かの安楽浄土は正覚阿弥陀の善力のために住持せられたり。いかんが思議することを得べきや。(中略)もし人ひとたび安楽浄土に生ずれば、後の時に意「三界に生まれて衆生を教化せん」と願じて、浄土の命を捨てて願に随つて生を得て、三界雑生の火の中に生まるといえども、無上菩提の種子畢竟じて朽ちず。何をもつてのゆえに。正覚阿弥陀の善く住持を徑るをもつてのゆえにと。

#### (三) 眷族功德。

「偈」に、「如来浄華衆 正覺華化生」のゆえにと言えり。これいかんぞ不思議なるや。おおよそこの雑生の世界には、もしは胎、もしは卵、もしは濕、もしは化、眷族若干なり、苦樂万品なり、雜業をもつてのゆえに。かの安樂国土は、これ阿弥陀如来正覺浄華の化生するところにあらざるることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷族無量なり。いづくんぞ思議すべきや。

#### 四 大義門功德。

往生を願う者、本はずなわち三三の品なれども、今は一二の殊なし。また溜瀆の一味なるがごとし。いづくんぞ思議すべきや。

#### 五 清浄功德。

『論』に曰わく、「莊嚴清浄功德成就」は、「偈」に「觀彼世界相 勝過三界道」のゆえにと言えり。これいかんぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの浄土に生まるることを得れば、三界の繫業畢竟して牽かず。すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得、いづくんぞ思議すべきや。

通読し三思すれば、親鸞が語ろうとするところは自ら明らかであろう。即ち雜業の故に雜生を受けるものの只中にあって、換言すれば疎外と孤立の中に流転する衆生の中にあつて、自ら念仏を相続しまた相い勧めて念仏を行ぜしめる常行大悲なる行為により、同一念仏の一道において、四海の内皆兄弟とする、同朋の交わり、即ち本願の僧伽もしくは浄土の僧伽を形成しようとの志願に生きていること、これこそが現生に正定聚に住し得て大般涅槃道を生きている者の生き様に外ならぬ。浄土の功德の行証は、親鸞においてはこのような本願の僧伽の建立という、極めて具体的な志願として行ぜられていったことに、私は感歎の念を禁ずることができない。

このように、浄土真宗を実現せしめる契機である浄土真実の教・行・信・証の四法についての、親鸞の極めて独創的な了解を以上のように尋ね、且つ迎ってきて、それはしばしば未来往生的な了解の影を落とすつつ、通念的に理解されているように、単に浄土乃至は往生に関わる事柄であるにとどまらず、むしろより根源的に、真如一実即ち無上涅槃、乃至はその功德に関わる法であることを確かめ得て、私は深い感銘を覚えずにはおられない。そしてこの四法にかくも深い意味を尋ね当てた親鸞の、その思索の重厚さを改めて思わずにはおられない。四法のこの深義の開顯によつて、浄土真宗は唯単に通念的に往生浄土の仏道としてのみ了解されるべきではなくして、それを更に根源化して誓願一仏乘即ち如来の誓願を根拠として成就する無上仏道といわれるべき積極性をもつ仏道であることが、十分の根拠をもつて顕揚され、基礎づけられたのであった。そしてこのような本願の行信道、やがて行証道を、本願の名号の開名によつて一切苦悩の群生海、即ち流転する群萌に告知し、開示し、実現する教説を、親鸞は、

如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち仏の名号をもつて、経の体とするなり。  
と了解した『大無量寿経』に見い出し、満々たる自信をもつて、

それ真実の教を顕わさば、すなわち『大無量寿経』これなり。

と宣言し、顕揚したのであった。当然のこと、この『大無量寿経』の眼目、即ち真実教たる所以は、願心を語る本願の教説と共に、それ以上の重さをもつて、「願成就の文」の教説にあると捉えなければならぬであろう。そこに語られる「聞其名号」なる一語が告げる出来事、即ち諸仏称揚の名号を聞くことにおいて、大悲の願心の名号りという根源からの招喚の声を聞くこと、この名告りに応じた覚知を一心帰命尽十方無碍光如来と表白し応答すること、ここに親鸞が十方の群生海を一身に荷負して、『大無量寿経』を以て真実教と顕揚する、自覚的立脚地がある。